

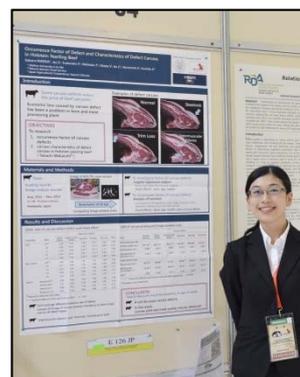
## 第16回 AAAP 大会参加報告

帯広畜産大学大学院 畜産学研究所  
前田 さくら

2014年11月10日から14日にインドネシアのガジャ・マダ大学で開催された第16回 AAAP 大会において「Occurrence factor of defect and characteristics of defect carcass in Holstein yearling beef」という題目でポスター発表を行いましたので、報告いたします。

### 【発表概要】

瑕疵は枝肉の商品価値を下げ、枝肉価格を低下させる大きな要因となります。本研究では、若齢ホルスタイン肥育牛である十勝若牛®の去勢牛 9,748 頭の格付記録および第 6-7 切開面の枝肉横断面画像を用いて、瑕疵の発生に影響する要因を調査するとともに、瑕疵が発生した枝肉の特徴を調査しました。その結果、瑕疵の発生率は 0.44-1.74% でした。またロジスティック回帰分析の結果、農家や出荷月齢が瑕疵の発生率に影響しており、特に出荷月齢が 16 ヶ月の個体は 12 ヶ月の個体と比較すると、ズルが発生する危険率は 7.54 倍、カツジョが発生する危険率は 6.04 倍と発生リスクが高くなることが解りました。加えて、瑕疵ごとに歩留や肉質への影響がみられ、特にズルやカツジョの枝肉は枝肉重量が軽く、ロース芯面積も小さい傾向がみられたことから、これらの発生を抑制することは、産肉性の向上に寄与すると期待されました。



### 【大会について】

本大会は 41 ヶ国から参加者が集まり、口頭発表とポスター発表を合わせて 757 題の研究発表が行われた大規模な大会でした。会場となったガジャ・マダ大学は、18 学部を有するインドネシアで最も大きな国立大学であり、運営スタッフだけでなく Welcome ceremony など連日開催されたイベントでは、ガジャ・マダ大学の学生がインドネシアの伝統的な踊りや歌を披露してくれました。また企業ブースではバティックや銀細工などの工芸品が紹介されていましたが、なかでも Fat tailed sheep (脂尾羊) の展示が印象的でした (写真)。脂尾羊は脂肪を貯めるために尾が太く発達している品種で、アフリカ、アジアなどの砂漠や熱帯地域において貴重な食糧源として飼養されてきた歴史があるそうです。羊はすぐに断尾してしまうイメージがあったため、このような尾を食用とする品種がいたことを知り驚きました。



ポスター発表では、牛肉の写真を掲載していたこともあり、今回のテーマである瑕疵に関して以上に和牛についての質問を多くいただきました。実際に食べたことがある人は少数でしたが、インドネシアでもホテルなど一部の高級店では和牛の肉を扱っており、霜降り肉や飼養方法に興味を持っている方が多いようでした。海外における和牛への関心の高さを感じる一方で、国外で流通している和牛の多くが外国産であり、日本産の黒毛和種について正しい知識とその魅力を海外に向けて発信していく必要性を強く感じたポスター発表となりました。

最後になりますが、このような素晴らしい機会をいただきました日本畜産学会の皆様、この場をお借りしてお礼申し上げます。